

## 履修登録できる単位数の上限設定の影響

坂 田 真 人

### 1. はじめに

平成14年度から単位の実質化に向けての一つの施策として、履修登録できる単位の上限設定が教育文化学部と工学資源学部で導入された。各学部の上限設定の趣旨や意図が異なるので同一の土俵で論じることはできないが、教育文化学部は原則として年間54単位（半期30単位）、工学資源学部は原則として半期22単位が履修登録の上限である。学生が履修届を提出する際、特に工学資源学部のすべての新生はそれだけ履修科目選択を真剣に考えなければならなくなった。

本資料の目的は、この上限設定によって授業科目の履修登録数がどのように変化したか、学生の履修科目選択がどのように変化したかを数値データとして示すことにある。分析の基礎データとして教養基礎教育科目の履修届の状況と単位取得の状況を使用して、13年度と14年度の状況を比較する。この施策が開始された直ぐに、その影響を調べ、判断するのは拙速過ぎるとの批判もあると思われる。しかし、上限設定の目論見通りに状況が推移しているであろうか、新たな問題が持ち上がっていないだろうかという点を調査し、状況を掌握しておかねばならない。現時点でどのような影響が現れているかを早期に数値的に示しておくことが、今後、単位実質化の議論の参考になると考え、速報として報告する。

調査は、授業を計画する教員側の立場から、まず各授業科目の履修登録状況の変化を示す。次いで、履修する学生の立場から、影響の大きい工学資源学部学生の個人々々がどのように履修計画を立てているかを示す。なお、取り扱ったデータは、平成14年11月時点のものであり、旧学部の学生や聴講生を除いている。

### 2. 各科目の履修登録者数の変化

履修登録単位の上限設定については、教育文化学部は緩やか、医学は実施していない、工学資源学部は厳しい。当然のことながら、工学資源学部学生が自由に選択科目できる科目にその影響が大きいと予想される。以下の結果はその予想の数値的な裏付けでもある。

#### 2. 1 全体集計

同じ入学定員である13年度と14年度の開講クラスと履修登録総計を表1に示す。

表1 全体集計

項 目	13年度	14年度
開講クラス数	434	460
履修登録総数	28,981	27,277
(内訳)		
教育文化学部	9,602	9,469
医学部	2,138	2,556
工学資源学部	17,241	15,252
クラス当りの履修者の平均と標準偏差	66.8人 ±52.3	59.3人 ±42.6
入学定員		850人
(内訳)		
教育文化学部		290
医学部		100
工学資源学部		460

14年度は前年に比較して、履修登録の数で約2,000、割合で6%減少している。それぞれの授業クラスへの影響は同一ではないので、各科目を、初年次ゼミ、目的主題別、国際言語、スポーツ教育、基礎教育に分類した集計が図1である。

この図から、減少分の大部分を目的主題別科目が占めていることがわかる。国際言語科目の履修登録は幾分減少し、逆に基礎教育は増加している。

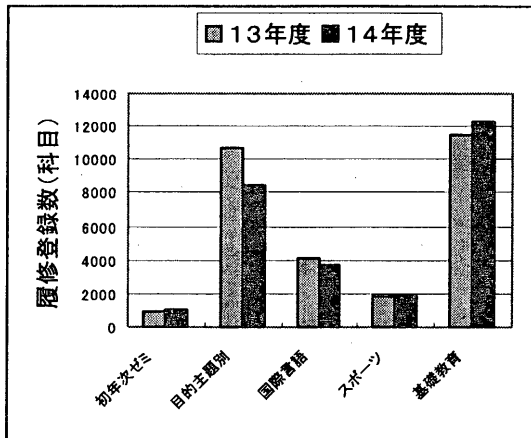


図1 各グループの履修登録数の変化

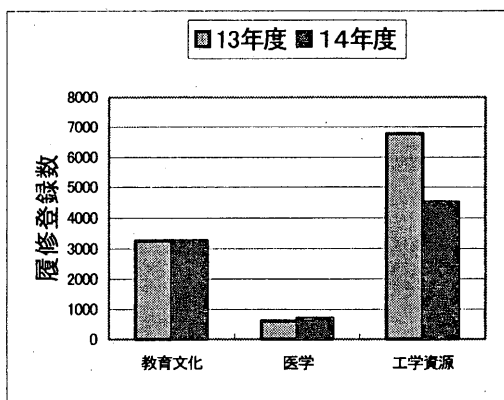


図2 目的・主題別科目の履修登録数

目的・主題別科目以外の科目は、その大部分が必修科目又はそれに準じる科目であるから学生の選択の余地は少ない。履修登録の増減の要因として、上限設定以外に、カリキュラムの変更も調べておかねばならない。14年度から医学部では、初年次ゼミ2単位、目的主題別1単位、基礎教育2単位の計5単位が卒業に必要な単位として増加している。また、工学資源学部の多くの学科では、基礎物理学と基礎化学を前に半期シフトして1年次前期から開講するように変更になった。基礎教育の履修登録数の増加はこのカリキュラムの変更によるものである。

## 2.2 目的主題別科目の履修状況

履修登録単位の上限設定の影響は目的主題別科目に顕著である。この影響は当然予測されたところであり、学生にしっかりした授業計画を立てさせる趣旨にかなったものであろう。図2に学部毎に目的主題別科目の履修登録数を13年度と14年度

で対比している。表1の約2,000の減は、工学資源学部学生に起因することが分かる。

ところで、学生は目的主題別科目に対して卒業に必要な単位の何倍の履修届を提出しているのだろうか。学部毎の差違を表2に示す。

表2 学生一人当たりの平均履修科目数

学部	科目数		卒業要件の単位数
	13年度	14年度	
教育文化	11.2	11.2	10~12
医学	6.2	7.1	11*
工学資源	14.7	9.8	12

\* 13年度10, 14年度11

表2に示す学生一人当たりの科目登録数は、全履修登録者数を入学定員で割った値である。おおざっぱに一人の学生が1年から4年(又は6年)までに何科目の履修登録をおこなったかを表している。この値は各学部における卒業要件が異なるので単純比較はできないが、1科目2単位と換算して、14年度では卒業に必要な単位数の1.5~2.0倍の履修登録を行っていることになる。13年度と14年度の差が著しい工学資源学部については次章で再度取り上げる。

## 2.3 国際言語科目の履修状況の変化

国際言語科目の履修方針は学部間で最も異なるところであろう。図3に各学部の英語(外国文献講読は除く)と非英語(ドイツ語など;日本語は除く)に分けて13年度と14年度を対比して示す。教育文化学部では、英語が減少している。一方、

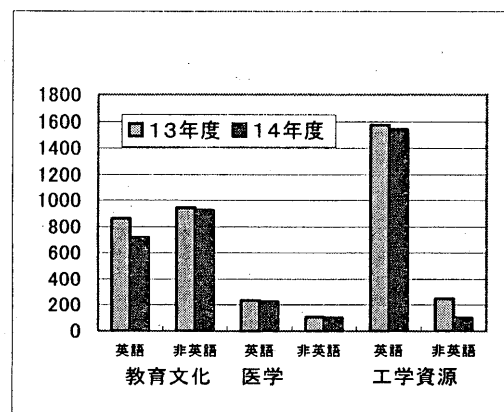


図3 英語・非英語の履修登録

工学資源学部では非英語が半減している。これは各部の特色の現れかもしれない。医学部では変化が見えない。

## 2. 4 授業クラス当たりの履修者の変化

履修単位の上限を設定した効果の一つに各クラスの受講生の適正化が挙げられている。14年度は開講クラスが増加していることもあり、表1にみるように、授業クラスの人数は平均で約67名から約60名と減少している。クラス当たりの人数は、学部や学科等の定員と、その科目が必修科目か選択科目かの差に大きく左右される。そこで、各学部の学生が等しく科目を選する目的主題別科目に議論を限定する。目的主題別科目において、13年度の開講科目数は124クラスの受講生の平均は約86名であり、14年度の開講科目数は140、クラスの平均は約61名となっている。適正な人数に近づいているように見える。

クラスの受講生数数の分布を図4、図5示す。

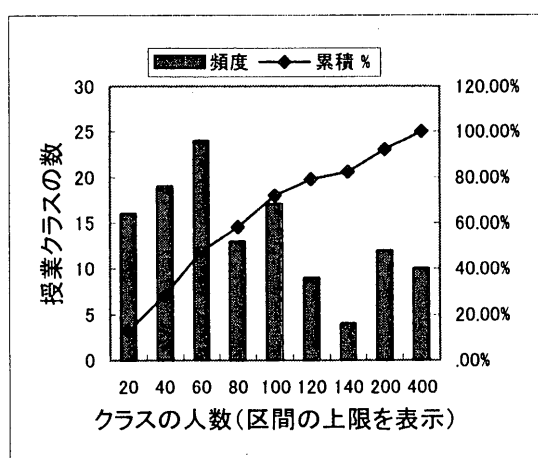


図4 13年度のクラス人数の分布

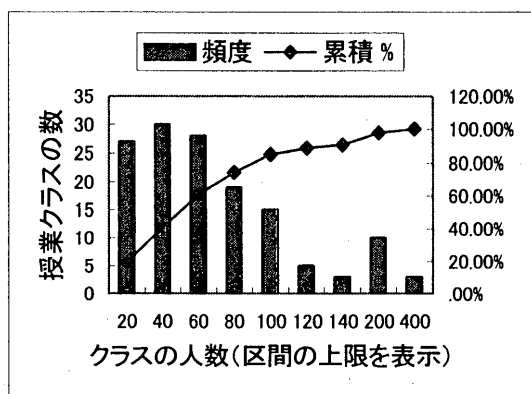


図5 14年度のクラス人数の分布

この図から、120名を越えるクラスのパーセンテージが21%から11%と半減していることが分かる。そして、20名以下のクラスは13%から19%と増加している。14年度の分布の形状が、13年度の形状の単純縮小でないことに注意すべきである。分布の形状が異なっている理由は、大人数クラスを削減するという教養基礎教育の積極的な方策の遂行によるものであろう。

## 3. 工学資源学部学生の履修状況の変化

前章では、授業科目をキーとして上限設定の影響を見てきた。ここでは、大きな影響を受けている工学資源学部の学生個人毎の影響を調べる。上限設定の影響を調べるため、13年度と14年度の新入生に限りて比較検討する。また、取り扱う数値を、授業科目ではなく、授業単位数とする。

### 3. 1 学生の履修登録の状況

13年度と14年度の履修登録単位数の変化を図6に示す。

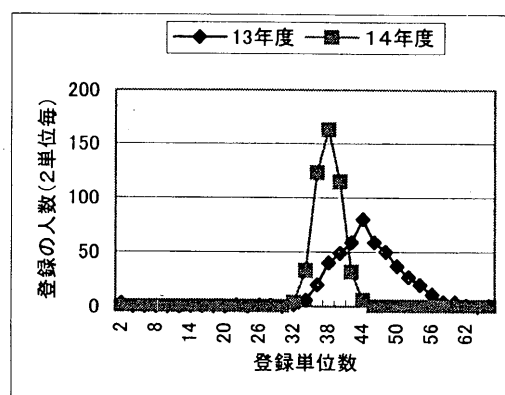


図6 学生の履修登録単位数の頻度

前期と後期の登録単位数を横軸に2単位区間で、縦軸にその区間の人数とした頻度分布を示す。登録単位の上限は半期22単位であるので、年間では、14年度は44単位以下となり、36~40単位のところに集中している。このデータは教養基礎教育科目に限定しており、専門科目は含まれていない。各学科では専門科目を4~8単位開講しているの、大部分の学生は限度一杯に履修登録を行っていることが分かる。13年度は、教養基礎科目で44単位を越えて履修届を出した学生はに全体の45%を占めていた。

### 3. 2 目的主題別科目の変化

図6の結果は、選択の自由度が最も大きい目的主題別の受講によるものであるから、目的主題別に限って登録単位数を示したものが図7である。縦軸と横軸は図6と同様として、13年度と14年度を比較する。13年度の目的主題別科目の登録単位数の平均は18.6単位で、14年度の平均は10.6単位である。卒業に必要な単位数が12単位であるので、13年度は1年次でその1.5倍程度の履修登録を行っていたことになる。14年度は、卒業要件である12単位数に満たない学生が約50%いるので、2年次においても目的主題別科目を2～6単位履修すると考えられる。

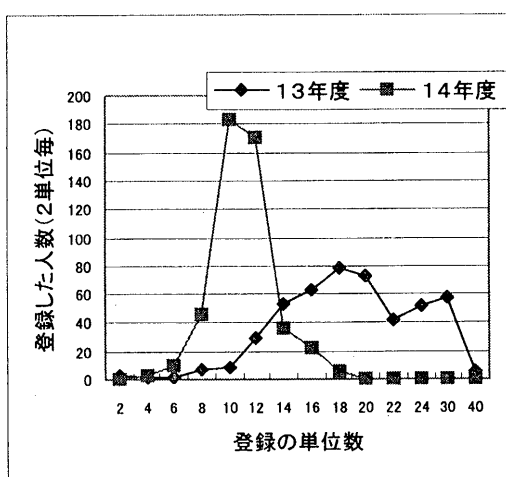


図7 目的・主題別の登録単位数の頻度分布

### 3. 3 非英語科目への影響

工学資源学部学生の科目選択の影響を受けている科目に、ドイツ語などの非英語科目がある。

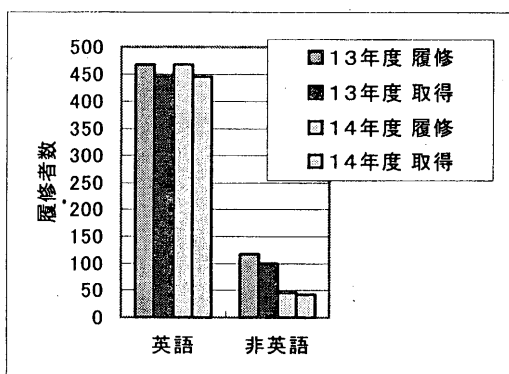


図8 英語・非英語の履修状況

学部の教育方針は英語重視であり、非英語科目の履修の奨めは積極的でない。13年度と14年度の履修届数とその単位取得数を示す。非英語科目の履修者は11年度から13年度にかけて減少を続け、14年度でさらに半減したという結果である。

例年、非英語の受講は、1年次前期から〇〇表現法の講義が配当されているので、2年次での受講生は多くない。13年度や14年度とも10名弱である。

### 3. 4 単位取得の状況

上限設定の目的は単位の実質化である。各自の勉学の目標にかなう履修計画を立てて修得することが望まれている。履修可能なものを出来るだけ多く適当に登録し、簡単に単位が取れるものから集める風習を排除したいとの想いが上限設定に込められている。果たして学生はどのように行動しているのか。この検証は難しい。数値的な結果として、履修登録とその単位の取得状況から推測してみる。なお、現時点で採取できるデータは年度前半のものである。

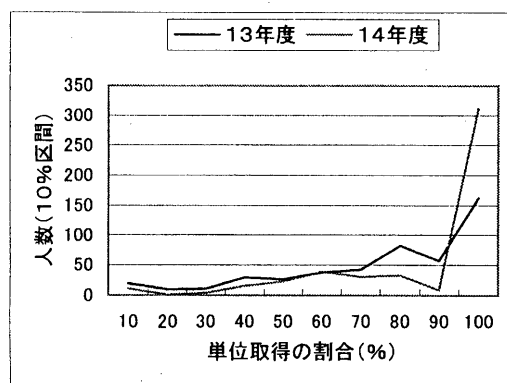


図9 単位取得の割合

13年度の目的主題別登録単位の合計は4,383あり、取得した単位の合計は3,209であるので、合格率(単位取得率)は73%であった。14年度の結果は、合格率は86%と向上した。明らかに、授業を放棄した、あるいは不合格であった割合が減少している。合格率を教育文化学部や医学部と比較すると、目的主題別科目かつ14年度前期として、教育文化学部は86%と同じく、医学部は90%と高い。工学資源学部学生はこれまで目的主題別科目を真剣に勉強しこなかったのかもしれない。

学生個人毎に調べた結果が図9である。登録単

位数に対する単位取得の割合を合格率としている。横軸に単位合格者を10%毎に区分し、その区間に入る学生の人数を縦軸に示している。図は合格率100%の学生が13年度で158名、全体の35%、14年度で312名、全体の65%であることを示している。14年度は、13年度に合格率が80%前後であったものが100%のところに移ったように見える。これは登録した授業をしっかりと勉強するという方向へ学生を誘導した効果の現れであろう。図からは合格率が60%以下の学生の割合は、13年度及び14年度ともに約20%と変化がない。確かに、真面目に勉強しない学生には登録単位の上限設定の効果が及ばないのであろう。

#### 4. 結び

本報告では履修登録単位の上限設定の影響を表面的に現れる数値データで提示した。ここに示したデータは速報として集計したので調査の視点に見落としがあるかもしれない。今後の計画立案や単位の実質化に向けての参考に少しでも役立てばと願っている。議論が工学資源学部偏っているのは、履修単位の上限設定の影響が大きいことに加えて、私とその設定時の学部の教務学生委員会委員の一人として、この決定結果の推移に無関心でいられないこともその理由である。